

遠隔授業事始

緒方修・北嶋修

- 1 教材(その1 概要)…………… 2
- 2 教材(その2 講義の内容)…………… 4
- 3 学生との質疑応答…………… 6
- 4 著作権処理…………… 8
- 5 受講状況の分析…………… 9

キーワード

遠隔講義 ヴィデオ・オン・デマンド 東アジア文化論 華僑 客家 琉球 沖縄

本稿は2006年度沖縄大学人文学部紀要の中味とほぼ同様である。ただし、これだけ読む人を想定し、若干の補足を加えてある。実際の講義展開は、遠隔授業以外に教室での授業を3回行った。事前説明、(遠隔授業終了後の)テスト指導、テストである。講義途中の反省点として、質疑応答が一部の学生に限られている、中間レポートがインターネットからの引用だけで終わっている、などが挙げられた。そこで期末のテストは教室で行うことにした。つまり完全な遠隔授業を実施出来た訳ではなく、対面授業との組み合わせであった。

要約

沖縄大学で06年10月から「東アジア文化論」の遠隔授業が始まった。半年間の講義を全てVIDEO ON DEMAND方式で行い、単位を付与する。沖縄では初めての本格的な遠隔講義である。教材は動画部分だけで10時間を越す。これからの教材制作に役立つよう制作過程での注意点や問題点を主に記した。

(英文要約)

Distance Education on "East Asian Culture" started in October, 2006 in Okinawa University. All classes are provided in Video-on-Demand style for 6 months, and credits are given. This is the very first lecture style in Okinawa. There are plenty of sources for the materials, including more than 10 hours of moving pictures. Problems and points to notice are described for further material designing.

この稿 = 「遠隔授業事始」(3に位置づける)は沖縄大学マルチメディア教育研究センター紀要第6号掲載の報告「遠隔授業の取り組み」(1)、同第7号「遠隔授業始まる・・・中間報告」(2)と合わせてお読みいただければ幸いです。第6号(1)では遠隔授業を始める前の本学の取り組み、技術サポート、コンテンツ制作のフロー、製作チーム体制など。第7号(2)では他大学の例や、本学で06年前期に行った「東アジア文化論」(遠隔授業・実験)の例などを示した。モニターには沖縄大学の大学院生や他大学学生、研究者、海外在住研究者も加わり、合計で100通を越す意見が寄せられた。

6号(1)、7号(2)は遠隔授業実施のための運用面に重きを置いたが、本稿(3)は実際に教材づくりを始める教員・スタッフの役に立つよう心がけた。企画・制作過程での問題点なども述べた。遠隔授業の準

備は同時に教材づくりの見直し、さらに教育方法の改革を伴わなければならない。生涯教育にも、聴覚障害者へのサービス提供にも役に立つことにも気が付いた。

対面型授業との比較研究はまだこれからの課題である。

何事もやってみなければ見えてこない。鳶のからむ林の中を、鉈をふるって切り分けながら進んできた。ようやく一人かがんで通れるくらいの小道が出来つつあるか、というのが感想である。

遠隔講義の受講者は前期の教室授業は50人。後期に10人が加わり登録者は60人。そのうちログインしていない者が19人、都合41人でスタート。そのうち継続して受講している者は27人。約半分である。データ分析は後半に記す。

1. 教材（その1 概要）

まず遠隔教材がパソコン画面ではどういう展開をしているのか、一部をお見せする。

遠隔授業は教学システムと教材コンテンツの2つで構成される。教学システムはマルチメディア教育研究センターにより運営されているもので、「moodle (ムードル)」というオープンソースのe-ラーニングプラットフォームによって構築されている。

教学システムは、学生へのインターフェイスとして講義の内容や質疑に対する回答を表示するほか、学生の登録、フォーラムの開設、小テストの実施といった教師側に必要な機能を備えている。登録された学生はそれに対して閲覧や書込み、回答ができるようになっており、いわばインターネット上での「教室」として機能する。

教学システムの画面

教師側の機能

- ページの開設、編集、閲覧
- フォーラムの開設、閲覧、書込み
- 小テストの作成回答結果の取得
- アクセス状況閲覧その他編集機能

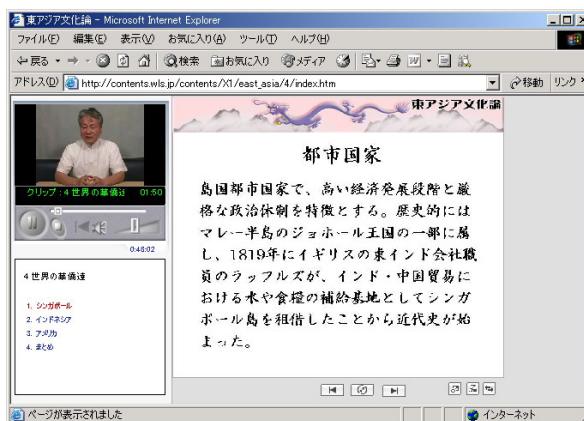
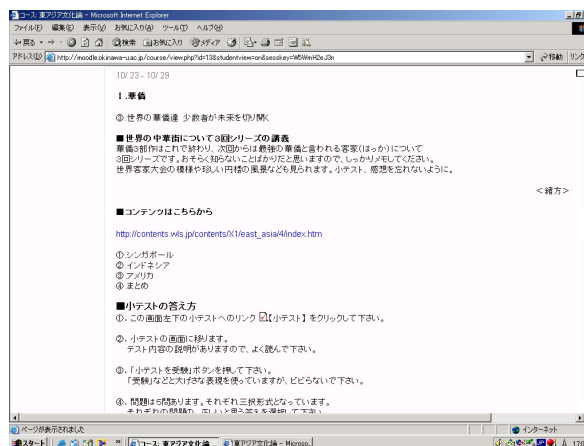
学生側の機能

- ページの閲覧
- フォーラムの閲覧、書込み
- 小テストへの回答

教材コンテンツの画面

教材コンテンツは講義映像(動画)、資料映像、スライド、音声が多媒体的に再生されるようになっている。

*なお東アジア文化論と遠隔授業の概要(サンプル)は以下のURLで見ることが出来る。約17分30秒。



http://contents.wls.jp/contents/X1/east_asia/1/index.htm

以下の、配信の日時を見ていただくと分かるが、受講可能回数は18週に及んだ。これは学年暦と遠隔授業の配信週を完全に連結させなかったからである。時間・距離に関係なく受講できるのがメリットだが、後に記すように学生はほとんどが前期の教室での授業日程(木・3校目)に「拘束され」ている。受講は「いつでも、どこでも、何度でも」可能だが、まだ十分享受している訳ではない。こちらも休講中であることを考えず、大学祭の期間にも配信したところ受講者が半減、あわてたことがあった。

「東アジア文化論」の配信スケジュール

1. ガイダンス: 「東アジア文化論」

授業の概要

「東アジア文化論」はインターネットを通じた遠隔授業です。

授業はコンピュータ室、または自宅などで受講することができます。

授業のスケジュール 変更

授業は以下の配信スケジュールに従って進めます。

	章	項	配信開始	配信終了
01		授業導入、オリエンテーション	2006/10/5(木)	-
02	1. 華僑	. 華僑・華人の世界	2006/10/9(月)	2006/10/15(日)
03	1. 華僑	. 日本の中華街	2006/10/16(月)	2006/10/22(日)
04	1. 華僑	. 世界の華僑達	2006/10/23(月)	2006/10/29(日)
05	2. 客家	. 客家とは何か	2006/10/30(月)	2006/11/5(日)
06	2. 客家	. 世界客家大会	2006/11/6(月)	2006/11/12(日)
07	2. 客家	. 客家を考える	2006/11/13(月)	2006/11/19(日)
08		中間レポート提出	2006/11/20(月)	2006/11/26(日)
09	3. 琉球	. 南海の王国	2006/11/27(月)	2006/12/3(日)
10	3. 琉球	. 琉球と中国	2006/12/4(月)	2006/12/10(日)
11	3. 琉球	. 琉球王国の滅亡	2006/12/11(月)	2006/12/17(日)
12	4. 沖縄	. 世替わり	2006/12/18(月)	2006/12/24(日)
13	4. 沖縄	. 沖縄の移民ネットワーク	2007/1/8(月)	2007/1/14(日)
14	4. 沖縄	. 辺境をフロンティアに	2007/1/15(月)	2007/1/21(日)
15		教室授業(試験前指導)	2007/1/25(木)	
16		全コンテンツ公開(試験準備: オンライン質問コーナー開設)	2007/1/22(月)	2007/1/28(日)
17		全コンテンツ公開(試験準備: オンライン質問コーナー開設)	2007/1/29(月)	2007/2/4(土)
18		試験(教室にて)	2007/2/8(木)	

【注意】各項の配信期間は1週間です。その週のうちに見ないと出席扱いにはなりません。

1/22～2/4は全コンテンツ閲覧可能(但し今までの欠席が出席となるわけではありません)

2. 教材（その2 講義の内容）

次に、講義の一部を紹介する。1には、10月末（わずか8日前）に参加した台北・世界客家大会の感想を盛り込んだ。2のホームページアドレスをクリックすると講座を見る事が出来る。の梅県、龍岩。および以下は目次。が約15分。まとめが約5分。合わせて約50分の講座だ。

スライド内の解説文は華僑・華人事典や拙著などに拠った。引用文は全て別に記した。

講義の内容

.客家(その2 世界客家大会) 11/6 - 11/ 12

1. 世界客家大会 情報交流の拠点づくり

第21回世界客家大会(台北)に参加しました。武道館みたいな大きな会場に4000人近い人が集まりました。台湾以外の参加者はおそらく500人程度。団長会議だけで100人くらいが参加。それぞれ別の会場でいっせいに食事。台北市長の馬英九氏(客家人)が挨拶すると半分くらいが立ち上がってデジカメや携帯のカメラで写真を撮っていました。人気抜群の次期総統候補です。台湾の客家人は約300万人ですが、政治的・文化的なパワーをどんどん付けてきているように感じました。

2. コンテンツ

.梅県、龍岩

.大会の効果

.大会の歴史

.まとめ

3. 小テスト

4. フォーラム

教材コンテンツの内容

左枠（動画）

（資料映像）

- . 04'33 ~ 05'08 第16回大会龍岩（福建省）
- . 05'31 ~ 06'08 龍岩大会開幕式
- . 09'57 ~ 11'16 資料映像（龍岩の風景、祭りなど）

字幕（動画中の字幕）

- . 00'14 ~ 00'34 「世界客族懇親大会」
- . 02'17 ~ 02'33 「蘭芳公司（ランファンコンス）」
- . 03'35 ~ 03'45 「宗族」
- . 09'19 ~ 09'28 「客家語」
- . 13'41 ~ 13'52 「世界華商大会」

東アジア文化論 - Microsoft Internet Explorer

ファイル(E) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)

戻る 進む 検索 お気に入り メディア

アドレス(D) http://contents.wls.jp/contents/X1/east_asia/7/index.htm

東アジア文化論

蘭芳公司

1777年、ホルネオ西端マンドール河周辺に作られた世界最初の共和国。大唐総長（大統領）は投票で選ばれ、慣習法による裁判、徴兵制、税制が確立していた。教育や福祉にも力が入れられた。107年続いたが後年はオランダが支配した。

7 客家を考える

1. 蘭芳公司
2. 客家を考える
3. 台湾客家ネットワーク
4. まとめ

ページが表示されました

インターネット

右枠 (スライド)

<p style="text-align: center;">II 客家</p> <p style="text-align: center;">6 世界客家大会</p>  <p style="text-align: center;">沖縄大学教授 緒方 修</p>	<p style="text-align: center;">世界客家大会</p> <p>正式には世界客属懇親大会。世界各地の客家系華僑・華人が集い親睦を図る。 1971年、香港が第一回。以後、原則として2年に一度、世界各地で開催。 近年は中国大陸での大会が多い。</p>
<p>. 00'00 ~ 00'15 「6世界客家大会」(タイトル)</p>	<p>. 00'15 ~ 01'37 「世界客家大会」</p>
<p style="text-align: center;">錫</p> <p>東南アジアの錫のほとんどは母岩から分離・流出して堆積した「砂場」であり、採掘と選鉱が容易。中国人錫鉱業が深峽植民地を基地にしてマレー西海岸の錫地帯へ続々と運出するのは1840年以降。</p>	<p style="text-align: center;">広東省梅州市梅県</p> <p>広東省東北部。省境をはきんで福建省永定とは違っている。山岳地帯で西北部には武夷山系が天然の障壁となっている。亜熱帯性気候。99.9%が客家。</p> 
<p>. 01'37 ~ 02'39 「錫」</p>	<p>. 02'39 ~ 03'01 「広東省梅州市梅県」(地図)</p>
<p style="text-align: center;">山あいの客家の故郷</p> <p>梅県都市圏は改革の初めの10年間においても、広東省の大陸部でぬきんでて貧しい所だった。(略)</p> <p>だが、中国の他の地方、あるいは海外の客家との、結びつきによって、梅県はコスモポリタンのイメージを持っている。</p> <p style="text-align: right;">—中国の実験 (E・ボーゲル) 日経新聞社</p>	<p style="text-align: center;">宗族</p> <p>父系親族集団。共有財産、一ヶ所に集らすタイプの宗族は宋代江南に表れ、やがて明代後期から清代にかけて、福建・広東地域を中心に団体性的に強いものが発達した。</p>
<p>. 03'01 ~ 03'35 「山あいの客家の故郷」</p>	<p>. 03'35 ~ 04'24 「宗族」</p>
<p style="text-align: center;">客家の組織</p> <p>相互扶助のための会館、联谊会、同郷会、宗親会、協同組合など、血縁、地縁、籍縁、業縁を契機とする多様な結社があるが、それらを総称して客家幫と呼ぶのは洪門や紅幫 (ホンバン) という秘密結社の流れを汲む歴史に由来する。</p>	<p style="text-align: center;">同族的結合</p> <p>中華思想を代表する朱子学・陽明学を信奉する客家は、北方異民族の侵略に抵抗し、南宋末の文天祥による反元闘争に結集。その後、華南～四川の山間地帯で鉱業・林業に依拠しつつ同族的結合を強め、明末に反清闘争、清末には洪門天地会や三合会を組織して反清復明・流滿興漢闘争を進めた。</p>
<p>. 04'24 ~ 04'53 「客家の組織」</p>	<p>. 04'53 ~ 05'25 「同族的結合」</p>

<p style="text-align: center;">幫的結合</p> <p>太平天国運動では指導者の洪秀全はじめ客家の貧農、鉱夫、運輸労働者が活躍。辛亥革命の孫文、廖仲愷、宋子文らも洪門教公会の幫的結合によって活動し、海外華僑から革命資金を募めた。</p>	<p style="text-align: center;">客家の横断組織</p> <p>一省出身者からなる広東幫、福建幫と異なり、福建、広東、広西、四川、湖南、江西など数省出身の客家の横の横断組織である客家幫は、共通の客家語と文化伝統による団結を、世界客属懇親大会によって強化しつつけている。</p>
<p>. 05'25 ~ 05'50 「幫的結合」</p>	<p>. 05'50 ~ 06'22 「客家の横断組織」</p>
<p style="text-align: center;">海外文化の浸透</p> <p>華僑が故郷へ帰る時は必ず異国の文化を持ってくるので、梅州の客家文化は異彩を放っている。例えば中国式と西洋式の交じった民家は梅州僑郷の特色。梅县台宮の「聯芳樓」は典型的。</p>	<p style="text-align: center;">大会をめぐる綱引き</p> <p>香港で第一回目が開催された世界客属懇親大会は、その後台湾での開催が多くなった。これは台湾が国際的政治空間を拡大しようという作戦であった。近年は中国大陆での大会が連続している。</p>
<p>. 06'22 ~ 07'12 「海外文化の浸透」</p>	<p>. 07'12 ~ 08'26 「大会をめぐる綱引き」</p>
<p style="text-align: center;">最強の華僑</p> <p>客家は漢民族の1グループ。中国・台湾双方で尊敬されている孫文、台湾の李登輝元総統、シンガポールの李光耀（リークワンユー）元首相、カナダのエイドリアン・クラークソン前総督など各国（地域）の最高指導者を生み出している。強い自我意識を持ち教育熱心、団結力が強い。</p>	<p style="text-align: center;">客家語</p> <p>中国大陆六大方言の一つ。使用人口はインドネシア、マレーシアなど東南アジア居住の客家をふくめ約3700万人。広東省梅縣方言がもっとも標準正しいとされている。</p>
<p>. 08'26 ~ 09'32 「最強の華僑」</p>	<p>. 09'32 ~ 11'27 「客家語」</p>
<p style="text-align: center;">想像の共同体 (1)</p> <p>ベネディクト・アンダーソンの指摘は示唆的である。 『国民とはイメージとして心に描かれた想像の共同体である。』 ……いかに小さな国民であろうとこれを構成する人々は、その大多数の同僚を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、』</p>	<p style="text-align: center;">想像の共同体 (2)</p> <p>『それでいてなお、一人一人の心の中には、共同の聖餐（コミュニオン）のイメージが生きているからである。』</p>
<p>. 11'27 ~ 13'00 「想像の共同体 (1)」</p>	<p>. 13'00 ~ 14'28 「想像の共同体 (2)」</p>

3. 学生との質疑応答

受講生との交流においては教育コーチの役割が大きい。事務局として学生と講義担当講師の間をつなぎ、講座が円滑に進行するように動く。最初に技術的な問題の解決、次に講座の中味についても学生達が質問をしやすい環境を創る。

アメリカのフェニックス大学のある教育コーチは、「始まってから2週間の間に受講生同士の自己紹介が行き交うようになると、後のコーチングは楽だ」と感想を述べていたそうだ。最初に受講者同士のつながりが出来れば、授業がうまく行く。教室での対面授業では学生同士のコミュニケーションは容易である、しかし顔の見えない遠隔授業ではいかにして成立させるのか。「東アジア文化論」に例をとれば、前期は教室授業、後期の遠隔授業は前期のメンバーのほとんどが継続したほか、10人が加わった。この中で教師（緒方）の顔を知らない学生はまずいないだろう。だから学生と教師との間のコミュニケーションはとりやすい、と推定できる。だが学生同士の交流はどうか・・・今後の課題である。

以下に学生との質疑応答の例を挙げる。

質問(学生)

話の中に「コンブドール」と言う仲介役の人の話があり、保証から何まで全ての事を請け負っていた、とありますが、「株」と言う視点で見た場合は、現在で言うと証券会社と言ったような感じなのでしょうか？

回答(教育コーチ)

「コンブドール=買弁」とは外国商社と契約関係を結んで中国の商社等の仲介をする中国商人のことで、外国商社が中国の市場へ進出するにあたり、このような仲介役を必要として多数必要としたのです。

買弁は、外国商社の完全な雇用下にあるのではなく、独立した商人として契約を結んでいました。契約の内容は輸出入の取次手数料、月給額、契約期間、契約解除、外国商社に故意に損害を与えた場合の訴訟などです。中国の取引先とトラブルがあった場合には外国商社に対して弁償する、そのためにコミッションをもらっているといった意味ですね。

「株」とは資本調達的手段ですから、貿易の仲介手数料とは話が違ってきますね。

買弁は、証券会社というよりは商社やエージェント会社と言うほうが正しいでしょう。

但し、買弁が外国商社の資金や自己資金を利用して独自に資金運用をするといったことはあったようです。

「東アジア文化論」のテーマの特性上中国に関連する事項が多く、中国人留学生からも積極的な発言が見られた。この講座には5人の中国人留学生がいて、きわめて熱心に受講している。

感想(学生)

中国の言葉で「落後就要挨打」ということがある。意味は「貧しければ、いじめられる」ということだ。

この言葉の意味をいま、強く感じた。

中国人がいたからこそ、アメリカの大陸横断鉄道ができた。しかし、彼らは感謝していないうちに風刺画を作った。中国のすばらしさを人々に見せてあげたい。

回答(教育コーチ)

『中国人の手で大陸横断鉄道ができたのに感謝されていない』ということへの憤りが多かったです。<中略>

中国人労働者(苦力)はそもそも黒人奴隷貿易が廃止されたことに従い、導入されたものです。<以下略>

彼が言う「風刺画」とは、中国移民の米国社会への進出を危惧する当時の米国人が描いた風刺画を教材として用いたものである。

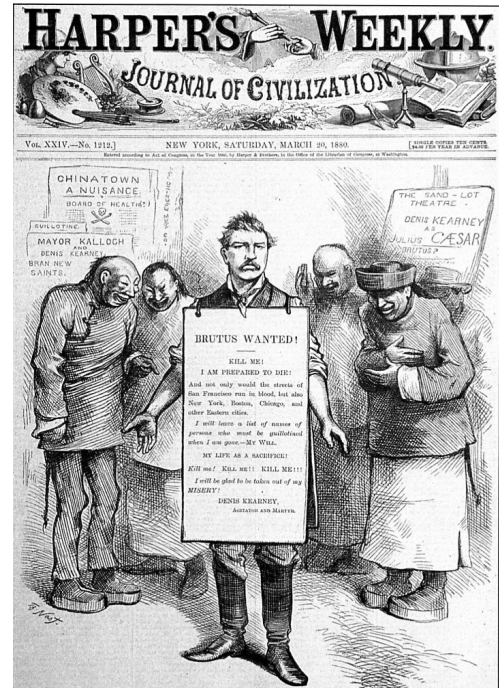
これらの歴史的な図版や写真などを使用して学生の興味を持続するようにも心がけた。



纏足の写真（清代）

客家女性の特徴として纏足をしないことに対する説明

出典：<http://www.suiunkan.com/oldphotos.html>



中国人移民が白人労働者の職を奪うことを懸念する米国の風刺画（19世紀）

出典『美國早期漫畫中的華人』

胡垣坤 等 編 香港: 三聯書店

此等名目繁多，惟實有百餘名匪徒等，在遠東獲匪懸賞，合行出示曉諭，此等匪徒，如能拿獲，即能享獲優厚賞格，有名匪徒，即如：花紅銀兩，存庫，犯到，即給，俾勿，懸賞，其外，案內，被誘，匪徒，其改過，自新，免予，深究，如能，拿獲，後，開首，要，各匪，解案，仍一律，給賞，各宜，體察，勿違，特示。

計開

孫文，即，逸仙，香山，縣，東鄉，碧山，角，不，登，年，約，二十九，歲，花紅銀，一千元。

夏，亞，伯，新，會，人，肥，矮，而，微，年，約，四十，歲，花紅銀，一百元。

李，亞，山，香，山，縣，都，下，村，人，身，高，腿，大，年，約，五十二，歲，花紅銀，一百元。

李，亞，南，南，海，縣，佛，山，人，年，約，三十四，歲，花紅銀，一百元。

楊，衛，香，山，縣，人，大，精，福，建，石，手，共，三，指，年，約，二十九，歲，花紅銀，一千元。

劉，長，清，遠，人，身，高，年，約，二十，歲，花紅銀，一千元。

朱，清，清，遠，人，年，約，二十七，八，歲，花紅銀，二百元。

孫文の逮捕に一千元の賞金がかけられた清代の手配書

出典：国立国父紀念館

<http://www.yatsen.gov.tw/chinese/art/show.php?title=6&id=16>

遠隔授業を継続する上で重要なことは、このような回答や情報の提供を教師側からも不断に繰り返すことである。学生は自分への質問に対して反応があることを期待している。教師側からの語りかけで学生の発言頻度も高まり、逆に教師側から何も反応しなければ学生からの発言もなくなる。また、学生の個性にもよるが、一部の者にとって教学システム上での文字による発言は教室での授業よりも積極的に発言することができるだろう。

課題としては、質問の質を向上させること及び学生同士の討議を行わせることである。学生からの感想の中には評価できるものもあるが、全体的なレベルは依然低い。より問題意識を持った授業への参画や学生間の活発な討議を実現させるには、遠隔授業での働きかけのみならず、教室授業との併用や学生同士の顔が見える、いわゆる「オフ会」などを行う必要がある。

4. 著作権処理

著作権については、教室の授業の中で使用する限り免除されている。ビデオオンデマンドの場合はどうか。現在の方式では「東アジア文化論」を受講している沖縄大学と早稲田大学の学生に限られる。講義の登録人

数は合わせて80人。実際の受講者はその半分の40人。教室での授業に準じて、「著作権料免除」と判断した。念のため、気になる著作についてはそのつど著作権者に了解を得た。

教材の中で使用する写真や地図、ビデオなどの取り扱いについては注意を要する。

本の表紙のみ紹介、あるいは中の写真を一枚程度紹介の時は著者・出版社のクレジットを入れた。写真・動画の使用は原則として著作権者に使用料を払った。

文章の一部を読み上げたり、大きく取り挙げたりした場合には、全ての著者に連絡をとって了解を得るようにした。毎回の講義の最後に一冊ずつ本を取り上げ(合計12冊)た。故人が一人いたので、出版社の著作権担当者に手紙を書いた。「西ひがし」(金子光晴)の出版元・中央公論新社の返事を参考までに記す。

「はじめまして。中央公論新社で著作権管理等を担当しております」と申します。

今回のビデオオンデマンドについてですが、あくまで限定された学生相手の授業に使われるのであれば問題はないと思います。条件としては出典を明示することと複製禁止の徹底です。よろしくお願ひします。 - 中央公論新社」

5. 受講状況

基礎データ

学生の受講状況は、教学システム「moodle」から容易に取得することができる。

期間中の学生のアクセス回数は5,879件、但しこのアクセスにはページの移動など、実際の受講とは関係ない動作も含むため、うち実際の受講として有効と思われる2,639件の動作を抽出した。対象期間は2006年10月5日から2006年12月23日までである。

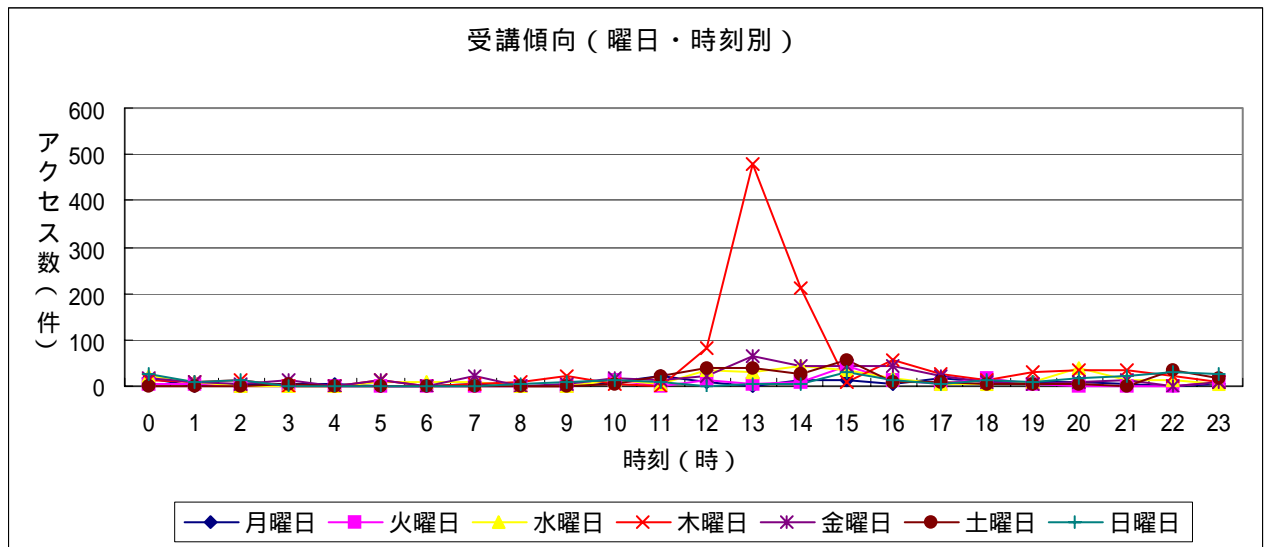
動作	操作()内は moodle での用語	件数
閲覧	講義閲覧 (course view)	1,214
	投稿閲覧 (forum view discussion)	1,007
書込	投稿書込 (forum add discussion)(forum add post)(forum update post)	187
	小テスト回答 (quiz attempt)	231
計		2,639

曜日・時刻別の受講状況

学生からのアクセスは、全ての曜日と時間で行われているものの、木曜日の12時から15時までの間に最も集中し、13時がピークであった。この時間帯は前期に行われた教室での「東アジア文化論」の授業時間帯と一致し、学生は本来の授業時間に従って受講していることがわかる。

その理由はまだ学生から聴取しておらず、学生が遠隔授業の利便性(いつでも、どこでも、何度でも)をどの程度認識し、活用していたかは不明であるが、次のように推測できる。

一つは他の授業の受講やアルバイトなどの関係から本来の時間帯に来校することが学生にとって都合がよいこと。あるいはパソコンを所有していない学生は校内で受講せざるを得ず、その際にはやはり本来の授業時間帯が都合がよいということなどである。



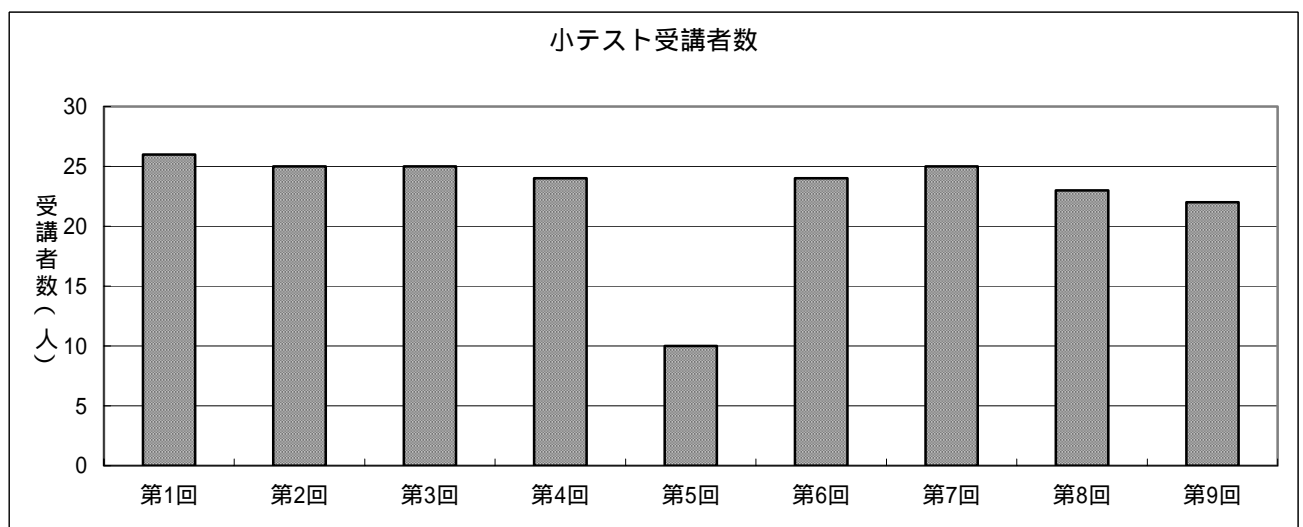
出席状況

「東アジア文化論」の受講資格を持ち、教学システムに予め登録されている学生は60人である。

うち32人が履修し、2006年12月現在では27人が履修を継続している。

内容	人数(人)	比率
登録人数(モニター・聴講除く)	60	100%
うち講座を閲覧した者	41	登録人数に対し 68%
うち出席した者(小テストに回答した者)	32	閲覧した者に対し 76%
うち出席日数が足りない者(出席日数5日未満の者)	5	出席者に対し 15%
うち履修を継続している者	27	出席者に対し 85% 登録人数に対し 45%

履修を継続している学生のうち、毎回25人程度の小テスト回答(すなわち出席)があり、出席率は約9割を超えている。また、学生の出席は学年暦に影響されることは小テストの受講者数から読み取れる。



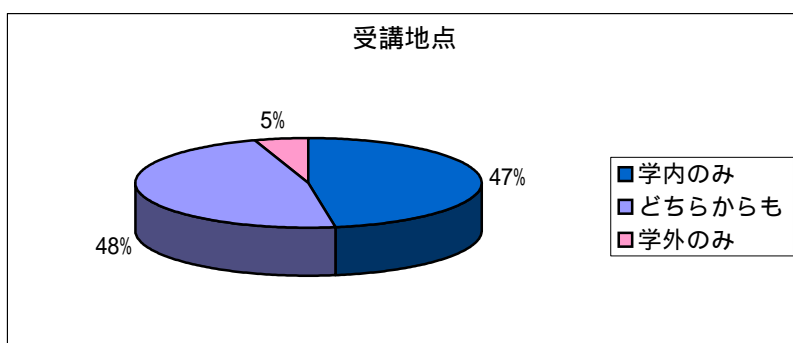
第5回は学園祭時期に当たっていたため小テストの受講者数が通常の半分以上となっている。学園祭時期は休講との意識が働いていたことの現れである。

授業の運営方針にもよるが、遠隔授業の随時性や融通性を考えれば学園祭時期などでも受講できることもメリットのひとつとして考えられる。但し、その際には学生へ十分事前告知することなど対策が必要である。

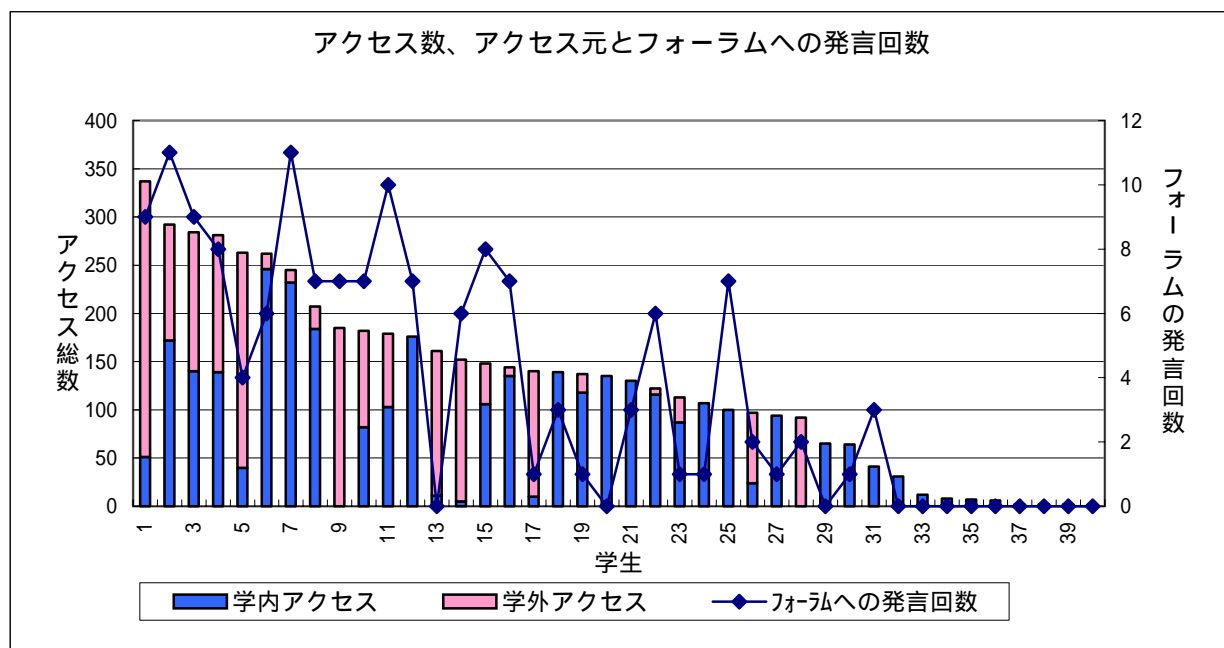
受講地点

受講として有効なアクセスをした40名学生の受講地点を見ると、95%の学生が学内から受講しており、うちその半数が学内コンピュータ室のみから受講している。学外からのみ受講した者は僅か2名であった。曜日・時刻別の受講状況から見ても、今回の事例では学内からの受講が主体となっていることが解かる。

学生の受講地点	単位	人
学内のみから受講		19
どちらからも受講		19
学外のみから受講		2
計		40



但し、学外からの受講頻度が高い学生は全体的なアクセス総数も概ね高いことが解かる。彼らは遠隔授業の利便性を良く活用し、積極的な授業への参画も心がけていると言える。



6. まとめ（今後の課題）

今回の事例には本学では初めてのビデオオンデマンド形式の遠隔授業であり、今後の課題をまとめとして挙げる。これらの点については今後も調査を行い、遠隔授業の円滑な運営に資する必要があると思われる。

学生の参画障壁

今回 60 名の学生が登録されていたが、最終的に履修者として残ったのは 27 名。約半数である。

教室面積や対面授業の制約を受けない遠隔授業としては 27 名以上の学生に対しても十分対応し得ると言える。学生には授業への興味の有無や、その他の授業履修などの事情もあると思われるが、この数字は果たして多いのか？少ないのか？授業の導入前には学生への説明会なども行ったが、パソコンを通じての授業ということで学生が受講を選択する上での障壁とならなかったか？

出席のカウント方法

今回の事例では教学システムから提供される三択式の「小テスト」に答えることで「出席」とみなした。

しかしこの方法は機械的に過ぎ、安易であったと思われる。

フォーラムでも書込みも多くは教室授業での「出席カード」に記される感想や質問の域を出ず、質問の質の向上や学生同士の討議を誘引するには至らなかった。今後はフォーラムへの書込みをもって出席とみなし、そこから更に質問や討議を誘引することが必要である。



小テストの画面（三択式）

不断の更新や情報提供

「3. 学生との質疑応答」で述べたとおり、遠隔授業運営のためには不断の情報更新や学生への対応が必要となる。これを教室授業より重い負担と見るか否か？今回の事例では、学生への対応は主として教育コーチによって行われたが、これらの対応作業で最低でも 1 回につき 2 時間は費やす。

しかし、遠隔授業の特性の一つに教学記録の蓄積が挙げられる。教室では単なる会話として消えてしまう学生との対応も教学システムを通せば記録として蓄積され、その後の授業の質向上に活用することが期待できる。

教室授業との比較

随時性（いつでも）、随地性（どこでも）、反復性（何度でも）は遠隔授業の最大の特性であると言える。

これにより教室授業の制約を補うことで、学生の負担軽減や受講機会の増加を図り、学生により深い理解と考察を促すことが遠隔授業の目的であるとも言える。

今回は教室授業との比較は行わなかったが、来期はこれらの点について精密な比較検証を行いたい。

（この稿は概ね前半を緒方、後半を教育コーチの北嶋が執筆した）